

## 拒絶過敏性の認知行動的特徴と抑うつ気分への影響

Influence of cognitive-behavioral features  
of interpersonal rejection sensitivity on depressive mood

栗山 晴菜 (Haruna Suyama) 指導：鈴木 伸一

抑うつ発生のメカニズム解明は、臨床心理学において重要な課題である。本論文は、抑うつの発生および悪化を引き起こしうる個人の脆弱性として「拒絶過敏性」を仮定し、拒絶過敏性の認知行動的特徴が抑うつに与える影響について検討を行なった。ストレスとなる出来事を経験を前提とした従来の素因ストレスモデルによる抑うつの理解に加え、拒絶過敏性をはじめとした個人の特徴がストレスを生成することに着目したストレス生成モデルの観点からの理解を試みることで、従来の知見を補完する形で抑うつの発生、維持の背景にある拒絶過敏性の認知行動的特徴について明らかにするものである。本論文は、全5章から構成されている。

第1章では、抑うつや拒絶過敏性に関する国内外の先行研究が展望され、以下の2点が大きな課題として整理された。すなわち、(1) 対人ストレスは抑うつに最も影響することが示されており、臨床知見から抑うつのリスクとなるパーソナリティとして拒絶過敏性が定義されたが、拒絶過敏性とうつ症状との関連についてはいまだ十分に明らかにされていない点、(2) 拒絶過敏性の認知行動的特徴に関する実証的な検討がなされていない点、である。拒絶過敏性の認知的特徴については、拒絶に対する予期、知覚、反応の循環による自己充足的強化を説明したRejection sensitivity model (Levy, et al., 2001) が提唱されているが、実証的な検討はなされていない。行動的特徴については、拒絶過敏性の高い者はただ拒絶体験を繰り返しているわけではなく、拒絶されることを避けるために相手の望むであろう行動を予防的に選択することによって拒絶されることを避けていると考えられるが、そのような検討はなされていない。そのため、拒絶過敏性の高さが対人ストレスや抑うつに与える影響については不明な点が多く、これらの点を解決することを本研究の目的として、研究全体の仮説モデル、本研究の意義と、本研究の構成が示された。

続く第2章においては、問題点(1)を解決するために、抑うつに対する拒絶過敏性の影響性を検討した。研究1において、拒絶過敏性を測定する尺度であるInterpersonal Sensitivity Measure (以下、IPSM; Boyce & Parker, 1989)を翻訳し、健常者326名を対象に質問紙調査を実施し、信頼性および妥当性を検討した。プロマックス回転を

用いた最尤法による探索的因子分析の結果、日本語版IPSMは「関係破綻の不安」、「他者を傷つける不安による非主張性」、「批判されることへの懸念」、「社会的自己像と真の自己像の不一致」、「他者評価追従」の5つの下位因子により構成される概念であることが明らかになった。また、確認的因子分析の結果、この5つの下位因子は「拒絶に対する恐れ」と、「拒絶に対する回避的態度」の2つの高次因子に大別されることが示された。信頼性係数の算出、および対人的傷つきやすさ尺度との相関分析による併存的妥当性の結果から、日本語版IPSMは十分な信頼性および妥当性を有する尺度であることが示された。研究2においては、抑うつに対する拒絶過敏性の影響性を検討するため、健常者70名を対象に質問紙調査を実施し、拒絶過敏性、対人ストレス、抑うつ、さらに従来の理論における抑うつの説明変数として反すうを測定した。相関分析およびステップワイズ法による階層的重回帰分析の結果、拒絶過敏性や対人ストレスの高さは、従来の抑うつ研究で扱われてきた諸変数の共通要素である反すうと同時に扱った場合にも、抑うつに対して十分な予測力を有することが示された。以上のことから、抑うつの発生・維持を説明する際に拒絶過敏性を扱うことの重要性が示唆された。

第3～4章においては、問題点(2)を解決するために、拒絶過敏性の高さが抑うつのリスクとなる背景となる認知行動的特徴やその過程の特徴について検討を行なった。

具体的には、まず第3章では、拒絶過敏性が高い者の認知的特徴について検討するために健常者37名を対象に実験を実施した。PC上で架空の排斥状況を体験させる課題であるCyberball課題を用いて、拒絶予期、拒絶知覚、気分を測定し、Rejection sensitivity modelの妥当性について実験的な検討を行なった。研究3-1において、測定時点(受容条件、排斥条件)をレベル1、個人をレベル2とした線形混合モデルによる回帰分析、およびステップワイズ法による重回帰分析を実施した結果、拒絶予期が高いほど拒絶を表す手がかりを知覚しやすく、拒絶されたとき知覚するほど次の状況における拒絶予期が高まるという悪循環が示された。さらに、拒絶を知覚した程度が大きいほどネガティブ気分が高くなることが明らかにされた。さらに、研究3-2において、ステップワイズ法による重回帰分析の結果、拒絶

過敏性の高次因子である「拒絶に対する恐れ」の高さを考慮した場合には、拒絶を知覚した際のネガティブ気分は、拒絶知覚の程度によらず、拒絶に対する恐れの高さによって予測されることが示された。

次に、第4章においては、拒絶過敏性が高い者の行動的特徴について検討するため、友人同士のペア16組32名を対象に、互いの短所をテーマとした会話による実験を実施した。相手からの拒絶を予期した際にそれを回避・阻止するために取られた会話中の行動（拒絶阻止の行動）を分類し、各拒絶阻止の行動の生起頻度が気分および抑うつに与える影響について検討を行なった。研究4-1において、拒絶を予期した場面（短所に関する会話）で取った拒絶阻止の行動を自由記述で尋ね、KJ法により分類した結果、会話を円滑に進めるための一般的な配慮を表す非言語項目と、相手を持ち上げ自分を低める発言を心がける言語的項目に整理された。続く研究4-2では、回帰分析によって、まず実験時の対人ストレスが3カ月後の抑うつの変化に与える影響を示した上で、続いて研究4-1にて挙げられた拒絶阻止の各行動の頻度が会話前後の気分の変化や対人ストレスに与える影響を検討した。その結果、拒絶予期がある状況において、言語的項目のなかでも相手を持ち上げる発言や、自身に対するネガティブな情報を積極的に肯定する発言が多い者ほど、会話後に対人ストレスを感じていた。研究4-3においては、拒絶過敏性の高次因子である「拒絶に対する回避的態度」と、拒絶阻止の行動の頻度の関連、およびそれらが対人ストレスに与える影響について検討した。群（回避的態度高群、低群）を独立変数としたt検定および、ステップワイズ法による重回帰分析の結果、拒絶に対する回避的態度が高い者は、拒絶阻止の行動のなかでも研究4・2にて対

人ストレスに影響することが示された行動の頻度が多く、対人ストレスを感じやすいことが示され、その結果として3ヶ月後の抑うつが高まりやすい可能性が示唆された。なお、拒絶に対する回避的態度の高低による、拒絶阻止の行動の頻度や対人ストレスの差は、拒絶予期あり条件のみで認められた。

第5章においては、本研究から得られた知見に基づき、総括的な考察が行われた。第1節では、まず本研究の結果および得られた知見が整理された。これらの結果を踏まえて、(1)抑うつに関連する対人ストレスの拒絶過敏性の観点からの理解、(2)認知行動的観点からの拒絶過敏性の再理解、(3)拒絶過敏性を脆弱性要因に据えたストレス生成モデルの観点を取り入れた抑うつの再理解、(4)拒絶過敏性の認知行動的特徴の再理解に基づいた抑うつの心理的援助の示唆、(5)拒絶過敏性に焦点を当てた抑うつの予防的アプローチの可能性、について論じられた。本研究の特徴は、拒絶過敏性を機能の異なる二つの水準で捉え直した点である。一つ目は、ストレスの増幅にかかわる、状況に対応した認知や行動であり、二つ目は、ストレスの生成にかかわる、特性的な認知や行動である。両者を併せて理解することで、扱うべき状況を予測し、予防的な対応が可能になると考えられる。一連の研究から、拒絶過敏性の特徴のなかでも物事の判断基準が自己の外（相手）にある傾向の、対人ストレスや抑うつへの影響が示唆された。自身の行動について自分で決断し、その評価についても行動の結果（相手の反応）に依る判断ではなく自己強化できること、つまり自身の中に軸を持つことが重要と考えられる。最後に、第2節では、本研究の限界点を踏まえた今後の展望が述べられた。